

# 三島由紀夫『豊饒の海』論

——「客観性の病氣」のゆくえ——

有 元 伸 子

—

三島由紀夫の遺作『豊饒の海』（昭和四〇年九月～四六年一月）について、佐伯彰一氏は、「近代小説の大前提と常識に向かって正面切った反抗をくわだてた作品」「三島流の壮大な反・小説の試み」（新潮文庫『春の雪』解説、昭和五二・七）だと言い、あるいは、松本徹氏は、「形而上学的叙情詩」「日本人が今までやってきたどんな文学的企てよりも、はるかに壮大な意図をもった作品」（共同討議・三島由紀夫の作品を読む／『国文学』昭和五六・七）であると述べるなど、この小説を評価する際に、従来の小説を超える構想をもって書かれた、近代小説への挑戦といった意味をもつ作品であるという見方は、すでに一般的になっている。そして、このような作品自体の枠組みについての見方には、私にも異論はない。

しかし、四巻をつなぐ認識者・本多の役割、作品に導入されている唯識の意味、寂寞を極めた結末部の意味、そして、『天人五衰』の主人公・安永透は賈物なのか、といった問題が未解決のまま残されてお

り、この作品の総体的な構造についての評価には、いまだ決定的なものはないと言ってよいのである。

さて、『豊饒の海』について、三島は、「世界解釈の小説」であると繰り返し表明している。「生まれかはり」という一見荒唐無稽な題材を扱っているが、『豊饒の海』は、決して神話やお伽話に類するものではない。「世界解釈の小説」という言い方には、三島が、生涯を通して認識してきた世界をトータルに叙述し、緊密な必然性で結ばれた筋を重層的に配置して、彼自身の獲得した「世界解釈」をあらわした「小説」であるという意図が表れている。

そして、その三島の「世界解釈の小説」において鍵をにぎるのが、四巻を通じての登場人物・本多繁邦である。この人物について、従来、「純粹観客」、「副主人公で、観察者、記録者」、「転生の保証人」などと評されているが、彼は、そのような位置にだけとどまっているわけではない、と私は考える。観客として観察する人物ではあるのだが、そのような客観的な安全な立場にだけ、本多は立っているのではない。本人の意志とは裏腹に、彼は、無難な観察者という立場に安住できなくなり、認識の危険な位置に入り込んでいく。彼の作品における

位置は大きいのであり、四巻全体を眺望すれば、転生者たちよりも、むしろ本多の方が主人公だと言ってよい。そして、本多こそが、三島のいう「世界解釈」を試みる人物なのである。つまり、三島の言う「世界解釈の小説」とは、三島自身が作品に自己の世界解釈を投影させることであるとともに、レベルをずらすと、登場人物の一人である本多の世界解釈の過程が作中に示されていくことでもあろう。

その点で、田中美代子氏の、「この小説の構図をしっかりと緻密に形成し、すべての原因であると同時に結果であり、一切を裏側から支えているのは本多繁邦であり、彼こそ宇宙の混沌に私たちを与える作家の世界形成の意志を象徴しているのである」（『豊饒の海』三島由紀夫——小説の二重構造——／「解釈と鑑賞」昭和五九・四）との指摘には、まったく首肯できる。これは、これまで、近代小説を超える意図をもって描かれたという点ではおおむね一致しつつも、作品全体の構造という面ではもうひとつ説得されがたかった、『豊饒の海』の評価史の中で、画期的な論だといってよからう。田中氏の言うように、本多は、「作家の世界形成の意志を象徴」しているのであって、つまり、本多こそが、作家三島の「世界解釈の小説」の中で、三島になりかわって世界解釈を行っている人物なのである。

『豊饒の海』の中心人物は、松枝清頭——飯沼勲——月光姫——安永透と続く転生者たちと、その転生の証人である本多とである。前者は二〇年ごとに生まれ変わり、その変わり目の最後の二〜三年を各巻で扱うという構成になっている。そして、この両者の関係について、田中氏は、「松枝清頭をはじめとして転生する人物は、現実の人間であるというよりも、本多がかくあるべく思い描いた理想像であり、純

粋な観念の結晶体である、といった方がよいようなもの」であり、「彼ら（転生する人物）はあえていえば、一人の観照者である本多が人生の道すがらに抱いた願望の具現として、彼の意識の内部で演じられたドラマの登場人物にはかならない」と述べている。そして、彼らは、「本多の思惟の対象」であるがゆえに、「本多の思考の宇宙空間を逸れることはない。彼が考え、理解し、追跡することのできる思念の磁場をはなれることは決していないのである」と分析している。

つまり、すべての転生は、この本多繁邦の認識が創造した劇（夢想と言ひ替えてもよい）なのであって、彼が存在しなければ、転生は起こりえなかったはずなのである。たしかに、作品結末部では、本多の世界解釈への確信がゆらぎ、すべてが虚無の世界に送りこまれてしまう。それでは、本多は転生を見なかったのだろうか。しかし、本多が、転生を見たと思っていたときには、彼の内部ではその見た世界が真実であったはずである。その感覚は、「見た」こととは認められないのか。また、「見た」こととして認められるならば、その見たものは真実なのか。このように、作品『豊饒の海』では、本多という一人物を追うことによって、一人の人間が何かを「見る」「認識する」ということの意味、また、その見た世界が、真実であるのか、幻にすぎないのか、それとも、感覚的真実として認められるものなのか、といったレベルにまで踏み込んでいるのである。認識や自意識、自我の問題を究極まで追求したと言ってよい。

このように考えてみると、本多と彼の認識の対象である転生する人物たちとの関係、また、本多の認識の内実が問題になってこよう。

この点に関して、田中氏は、「夢みる人である本多」は「その夢じ

たいである転生する人物と密接不可分な精神的双生児」「極言すれば同一人物なのである」としている。しかし、それは「極言すれば同一人物」なのであって、本多の認識をもう少し詳細にたどってみる必要があるようである。

本稿では、この認識者・本多を軸にすえて、本多の認識の内実を探り、そこから三島の遺作『豊饒の海』のもつ意味を考えてみたい。

## 二

まず留意すべきなのは、本多の認識する世界の背景に、唯識の理論が存在することである。本多は、『春の雪』の冒頭、十代で月修寺門跡から法話を聞いて以来、清頭の転生の謎を解くために、生涯をかけて、マヌ法典・ウパニシャット哲学・イオニヤ哲学・オルベウス教団・無着の「摂大乘論」・世親の「唯識三十頌」など、広範な哲学書や転生の教義書に読み耽る。とくに『暁の寺』は、戦火の下、本多が古今東西の輪廻転生の研究書を渉猟するという形で唯識の基本が語られるため、四巻全体の理論篇としての機能を持つ。この、『暁の寺』の前半分に記述してある唯識の理論について、三島は、死の直前の対談の中で、「あそこで生まれかはり哲学をブッておかないと、第四巻がわからなくなつてしまふんです。(略)この第四巻の世界は、第三巻の前半が前提にならなきや展開できない性質のものなんです」と述べている。つまり、この唯識の理論が、『豊饒の海』四巻の構造上の要となることを語っているのであるが、それは、一つには、本多が研究した唯識の理論自体によるものであり、もう一つには、唯識の理論を

本多が研究したのだということを示される。

本多は、清頭の転生の謎を解くために、仏書を耽読するのであるが、そうして、本多が学んだ仏典の知識は、逆に、彼が認識する転生の像の上に無意識のうちに重なっていく。例えば、三保の松原への散策から帰って、寝についた本多の夢の中には、天人が飛び交うのであるが、「本多の仏書の知識が夢にそのまま活かされてゐる」と描かれる。本多の夢は、現実から完全に遊離したものではなく、昼間に行った土地の影響を受け、しかも、自分が蓄積してきた転生に関する仏書の知識が加味されてきている。この夢と同様に、本多の見る転生の様態は、常に、彼があらかじめ仏書で研究したとおりの形をとって現れるか、彼が諳んずるまで読み返した清頭の夢日記の通りで現れるのである。そして、『豊饒の海』では、そのような予言となる仏書のことばや夢日記の内容が、伏線として、第一巻から、散りばめられている。つまり、転生に関して現れる事象が、すべて先取りする形で知識として本多の中に蓄積されており、彼は、これらの知識と清頭の夢日記の記述のとおり、現象を見るのである。

本多は見えてゐるのではなかった。認識者の目で覗き穴から覗いてゐるのではなかった。明るいつ夕光の公明正大な窓辺に立つて、自らの自意識が、命じたとほりに動くさまを、片や心の中で、自ら演じ、片や全能の力で指揮してゐるのだった。

(傍点は引用者・以下同様) (天人五衰・二三)

『天人五衰』において、本多が芝生の上の透と百子の様子を階上から眺めている場面であるが、ここに、本多にとっての「見ること」の機構が示されている。彼にとっての「見ること」は、ただそこにある

ものをそのまま見るのでもなく、「認識」だけでもない。すなわち、自意識によって世界を作っていく機構自体なのである。本多は、「自らの自意識」が、自己の内奥の「命じたとほりに動くさまを、……自ら演じ、……指揮」するという。そうして、自ら演じ、指揮して作り上げていった自意識の世界を、見ている対象の上に重ね、自分の自意識の動くまま、「操り人形」のように相手を扱うのである。

その見方は、「本多の自意識の雛型」であり、「この少年の内面は能ふかぎり本多と似てゐた」とされる透の「見る」と相似形である。透は「不可視のものを『見る』」目をもつのであるが、たとえば、彼が船を見るときには、次のように説明されている。

すでに大忠丸の船影は、そこを出てゆく興玉丸とすれちがふ形で、薔薇色の沖に模糊として泛んでゐる。それはいはば夢の中からじみ出てくる日常の影、観念の中からじみ出てくる現実、

……詩が実体化され、心象が客観化される瞬間だった。無意味とも見え、また凶兆とも見えるものが、何かの加減で一旦心に宿ると、心がそれにとらはれて、是が非でもこの世へそれを齎らさずにはおかぬ緊迫した力が生れ、つひにはそれが存在するところになるとすれば、大忠丸は透の心から生まれたものだったかもしれない。はじめ羽毛の一触のやうに心をかすめた影は、四千噸に垂んとする巨船になった。それはしかし、世界のどこかでたえず起つてゐることだった。

〔天人五衰・一三〕

ここでは、存在とは、透の「観念の中からじみ出てくる現実」であり、「心象が客観化され」たものであるとされている。人が、強烈に願望すれば「是が非でもこの世へそれを齎らずにはおかぬ緊迫した

力が生れ、つひにはそれが存在すること」になる。つまり、所与としての均一な現実世界を否定して、存在を生ぜしめるのは心であり、人間の意識が実在を生み出すという立場なのである。透にとっての「見る」とは、願望の表現であり、心象の客観化であり、存在を生じさせ、それに意味を付与することである。一般の「認識」とは異なり、実際にはないものを「見る」のである。本多の「見る」とも、この透の「不可視のものを『見る』」という見方と同様である。自己を認識者だと最初から規定し、見えすぎる目をもって、見ることに拘泥しつづけるのだが、彼は、純粹に客観的に現実を見るのではない。すべては、本多の認識が望むとおりの姿をとって、彼の目に映ったのである。

### 三

その機構が、作品のなかで説明されている。たとえば、タイを舞台とする『暁の寺』の始めの部分で、ジン・ジャンが勲の生まれ変わりであることを、本多が確認する箇所を見てみよう。まだ幼い姫に対して、「松枝清頭が私と、松枝邸の中ノ島にゐて、月修寺門跡の御出を知ったのは、何年何月のことか」とか、「飯沼勲が逮捕された年月日は？」といった質問をし、姫は、それに正確に答えるのだが、そこは次のように語られている。

本多は心中おどろいたが、果たして姫のお心の中に、すでに過ぎた二つの前世の物語が、あたかも小さな密画のやうに、そのままの形で詳さに録されているのかどうかは定かではなかつた。先程

ああして不義理を詫びた勲の言葉にしても、その言葉の背景をこまやかに御存知なのかどうかはわからなかつた。現に、こんな正確な数字も、全く無感動に、ただ思ひつくままの配列と謂つた具合に、姫の口から洩れたからである。

本多はそこで第二の質問をした。

「飯沼勲が逮捕された年月日は？」

「姫は、まず、まず、眠さうに見えたが、 歎みなく、かう答えた。

「一九三二年の十二月一日です」

〔暁の寺・三〕

そして、後に、ジン・ジャン自身が、日本人の生まれ変わりだと主張していた幼い頃の自分について、次のように語るのである。

「……もしかするとね。私、このごろ考へるのです。小さいころの私は、鏡のやうな子供で、人の心のなかにあるものを全部映すことができ、それを口に出して言つてゐたのではないか、思ふのです。あなたが何か考へる、するとそれがみんな私の心に映る、そんな具合だつた、思ふのです。どうでせうか」〔暁の寺・三〇〕

ジン・ジャンは、清頭・勲の生まれ変わりであり、それを、本多は、異国の少女の知るべくもない日付を知つてゐることで証拠だてている。だが、そのような超自然現象も、作品の中で、あくまでも一つの可能性としてではあるが、合理的に説明づけられているのである。これによれば、ジン・ジャンは、まるで巫女のように、他人の心を映す力をもつた子供であつたことがわかる。幼い姫が、尋ねられていることの意味も考えないで、いわば入眠状態で答えていた、という三章の状況は、三〇章で彼女自身がたどつたらしい日本語によって推測している仕組——自分は、「人の心のなかにあるものを全部映すことがで

きる」 「鏡のやうな子供」だつたのではないか——の説明と合致する。また、「鏡のやうな子供」とは、ジン・ジャン（月光姫……：月光は、言うまでもなく、太陽光の反射である）という命名とも適合するのである。感受性の鋭い人間が他人の意識を読む、ということは、現実にあるかどうかは別にして、考えられないことではない。実際にどうかということではなく、作品の論理構造としては、このような超自然現象も十分に説明されているのである。つまり、本多が見る転生の現象は、常にあらかじめ、仏書での研究や夢日記によって、本多に予測され、それ以外の転生は認識されなかつたように、三島は、周到に、作品の中で謎解きを行っている。「豊饒の海」は、決してお伽話ではなく、認識が究極には何を生み出すかを探る小説なのである。

ジン・ジャンが、なぜ清頭と本多しか知らない日付を答えることができたのか、なぜ勲の逮捕された日を答えられたのか。それは、本多が、その答えを心の中で念じていたからである。そして、なぜ、姫にそれを答えさせたかと言え、清頭の夢日記によって、転生者が南国の女性として現れることを予期しており、それを姫の上に被せて、姫が清頭と勲の生まれ変わりであることを、本多が願望していたからである。本多の認識欲は、このように転生すらも作り出してしまふほどの激しいものであつたのだ。

そして、本多は、「見る」人であることをやめられない。そもそも、本多が「見る」人であるのは、第一巻で、自己の感情のままに恋愛に殉じる清頭と自己とを比較した時からであつた。『春の雪』の一九歳のときに、「この若さで、彼はただ眺めてゐた！ まるで眺めることが、生まれながらの使命のやうに」と描写されて以来、本多は、一貫

して「見る」人・認識者として作品のなかに登場してきた。清頭——  
勲と、転生者たちは、自らの理想とする観念に殉じ、彼らを救おうと  
した本多の行為はことごとく無駄に終わるのである。清頭や勲の傍に  
いた経験から、本多は、自己が行為者にはなりえないことを知悉し、  
自己を、認識者・転生の証人として規定する。ところが、その本多が、  
勲の生まれ変わりである可能性をもつジン・ジャンに恋をするのである。

本多の願つてゐることは、実に単純で、(略)今の姫の一絲纏  
はぬ裸をすみずみまで眺め、(略)すべての成熟の用意ができあ  
がつたところを点検して、若い姫の肉体との比較に心ををののか  
せたい、といふだけのことなのだ。(略)それは「時」を知ること  
とだ。その丹念な照合の末、左の脇腹の黒子が依然として見当ら  
なければ、本多はきつと最終的に彼女に恋するだらう。恋を妨げ  
るのは転生であり、情熱を遮るのは輪廻だからだ。……

〔暁の寺・三〇〕

本多が願っていることは、タイで見た若い姫の裸と、十一年後の成  
熟した姫の姿とを比べてみたいということである。七歳の姫は、清頭  
や勲でないと知り得ない年月日を答え、勲の代わりに詫びの言葉を述  
べた。このように清頭——勲の生まれ変わりの徴候を見せながら、し  
かし、生まれ変わりの証である黒子はどこにもなかったのである。本  
多は、転生者であるかもしれない姫に惹かれ、同一化することを望む。  
だが、彼女が本当に転生者であったならば、これまでの清頭——勲の  
例から、自分が彼女に関与できないことはわかっていて、だからこそ、  
本多は、姫の肉体を検めたいのである。黒子は、「本多にとつては、  
不可能のしるし」だというのである。そして、「丹念な照合の末、左

の脇腹の黒子が依然として見当らなければ、本多はきつと最終的に彼  
女に恋するだらう」と述べる。黒子がなければ、ジン・ジャンは、本  
多の手の届かない転生者ではないからである。

そこで、本多は姫の肉体を見たいと望む。しかも、出来るかぎり、  
純粹な形で、姫の裸体を見たいと望み、自ら「客観性の病氣」と名付  
けて嘲笑う行為を行う。本多が望むことは、能うかぎり、見る対象を  
純粹に保つことである。見ている自己の姿が相手に影響を及ぼすこと  
なく、相手を純粹なまま保ち、その姿を見るのである。対象から距  
離を置こうとするロマン主義者でありつつ、対象から目を離すことの  
できない認識者のとるのが、「客観性の病氣」と名付けられた行為で  
あった。「決して参加しない認識者の陥る最終的な、快い戦慄に充ち  
た地獄」〔暁の寺・二五〕だと解説されたそれは、真実の、誰にも見  
られていないときのジン・ジャンの姿を見るための「覗き」見である。  
自分の姿を対象に「見られる」ことなく、相手を「見る」ことなので  
ある。その時、望める限り純粹な対象の姿を見ることが出来るはずだ  
と本多は考える。究極まで見者に徹した者のとりうる、最終的な方法  
であろう。

しかし、御殿場の別荘の書齋に覗き穴をうがち、そこから、本多が  
ジン・ジャンの姿を覗き見る場面において、三島は、注意深く記して  
いる。

本多はそこに誰にも見られてゐないときのジン・ジャンといふ、  
彼のこの世でもつとも見たいものを見る筈だ。彼が見ること、  
すでに「誰にも見られてゐないとき」といふ条件は崩れるけれど  
も。絶対に見られてゐないといふことと、見られてゐることに気

づいてゐないといふこととは、似てゐて実は本来別々のことなの  
だけども。……〔暁の寺・三六〕

たしかに、見ている本多の姿が隠されていることで、ジン・ジャン  
は、他人を意識しない、演技のない姿を本多の前に晒すだろう。しか  
し、それは、「見られてゐることに気づいてゐない」だけで、「絶対  
に見られてゐない」姿ではないのである。たとえ、本多が姿を隠そう  
とも、彼が見ている限り、ジン・ジャンは、「誰にも見られてゐない  
ときのジン・ジャン」ではありえない。「誰にも見られてゐない」純  
粋な対象を見たい、純粹に客観的な真実の世界を見たい、という本多  
の願望は、それ自体が論理矛盾である。本多が見ることで、「誰にも  
見られてゐない」という純粹性は必ず破られ、たとえ、ジン・ジャン  
に、彼が覗いていることを気付かれていなくても、覗いた瞬間から、  
彼女は「本多の認識の作った世界の住人」となってしまうのである。  
しかし、本多は、認識に汚染されない絶対の真実を見たい、と希求す  
る。認識者として、見ずにはいられないのである。

若いころから本多の認識の猟犬は俊敏をきはめてゐた。だから  
知るかぎり見るかぎりのジン・ジャンは、ほぼ本多の認識能力に  
符合すると考へてよい。その限りにおけるジン・ジャンを存在せ  
しめてゐるのは他でもない本多の認識の力なのだ。

そこでジン・ジャンの、人に知られぬ裸の姿を見たいといふ本  
多の欲望は、認識と恋との矛盾に両足をかけた不可能な欲望にな  
つた。なぜなら、見ることはすでに認識の領域であり、たとへジ  
ン・ジャンに気付かれなくても、あの書棚の奥の光りの穴からジ  
ン・ジャンを覗くときには、すでにその瞬間から、ジン・ジャン

は本多の認識の作った世界の住人になるであらう。彼の目が見た  
途端に汚染されるジン・ジャンの世界には、決して本当に本多の  
見たいものは現前しない。(略)

今にして明らかなのは、本多の欲望がのぞむ最終のもの、彼  
の本当に本当に本当に見たいものは、彼のゐない世界にしか存在  
しない、といふことだつた。真に見たいものを見るためには、  
死なねばならないのである。〔暁の寺・四二〕

「見る」と「認識」とは同質ではない。対象を見ると、その瞬  
間から、見られた対象は、見た人間の「認識が作った世界」の住人に  
なる、と本多は考える。見ることによって、見たものを取り込み、そ  
の現実を包みこむ形で、認識が世界を作るのだが、その認識の創作し  
た世界は、本多の心の中にのみ存在するものであって、その存在を客  
観的に証明することはできないのである。逆に言えば、自己が見たも  
のは、見た瞬間に創作された自己の認識世界であつて、純粹に普遍的  
な真実であるとは、決して言いきれない。たとえ、見ていることを、  
対象に気づかれていなくても、対象を見ていること自体が、対象を自  
己の認識によって作り上げることなのである。

しかし、本多は「見る」人であることを停止できない。ジン・ジャ  
ンの眞の姿を見ることが彼の希望であつた。しかも、自己の認識に汚  
染されない、純粹な対象を見たいと望むのである。「客観性の病氣」  
と名付けられた「覗き見」は、見ている自己を見られてゐる対象から  
隠す仕組によつて、普通に対象を見ることよりは、対象の側に演技  
がないだけ、純粹な対象に、より接近するとは言える。だが、それでも、  
覗き見る自己が介在し、瞬時に認識世界を創作してしまうのであれば、絶

対に純粹な対象であるとはいいがたい。認識者が、「見ること」の果てに望むことは、認識によって汚染されない純粹な対象を見ること、すなわち自己の存在しない世界（絶対）を見ることである。「彼の本当に本当に本当に見たいものは、彼のゐない世界にしか存在しえない」のであり、その「真に見たいものを見るためには、死なねばならない」のである。しかし、生き続けられない限り、見ることも、認識することもできない。この認識のもつ限界に、本多は思ひ到るのである。

しかし、本多は、この時点では、自己の認識に執着して、認識の阿頼耶識とを同一視することを肯んぜず、唯識論に完全には与しない。まだ、彼にとって、死の問題は切迫しておらず、死を想像して、その甘美さを楽しみつつ、ジン・ジャンの裸体を見ることを望むのである。

そして本多は、ジン・ジャンを覗き穴から覗き見る。覗いた本多が見たものは、慶子と睦み合っているジン・ジャンの姿であり、その時、今まで腕に隠されていたジン・ジャンの腋に、「昂を思はせる三つのはきはめて小さな黒子が歴々とあらはれ」、「本多はおのれの目を矢で射貫かれたやうな衝撃を受けた」。ジン・ジャンに、転生の証が刻印されていたのである。ジン・ジャンが転生者である以上、彼女は、本多の手には届かない。彼は、転生を見続ける人物だからである。そして、転生が続く限り、彼の前に転生があらわれ、彼はそれを見続けなければならぬ。そのため、「あの瞬間から、本多の心からは死は飛び去つてゐた。今や本多には自分を不死かもしれないと信ずる理由があつた」〔暁の寺・四四〕と感ぜられることになるのである。本多は、二十年ごとに訪れる転生者を、順に見続けていく自己の役割を再確認

したのであつた。

それにしても、幼い日にタイで水浴をしている時には、あるいは、プールでの水着姿のときには無かつた、ジン・ジャンの黒子がどうして本多が覗き穴から覗いたときにはあつたのだろうか。タイでの水浴の時には、本多のほかにも、おつきの女官も傍にいた。プールびらきでは、もちろん他の客が側にいる。衆目のなかでは、ジン・ジャンには黒子はなかつたのである。ところが、覗き穴の世界というのは、完全に本多一人が覗き見た世界である。本多以外には、ジン・ジャンの黒子に関心をもつ者はおらず、ましてや、それを見た者もないのである。現に、本多は覗き見しているところを妻の裂枝に見つかり、彼女も、覗き穴からジン・ジャンと慶子の姿を覗くのだが、「え、見たらう、黒子を」と念押しする本多に対して「さあ、どうですかね」と述べており、黒子の客観的な存在は、作品では証明されていない。本多のみが、黒子を見たのであつた。

つまり、ジン・ジャンに黒子が現れたのは、本多の認識が創作したからなのである。三島は、周到に、「見ることはすでに認識の領域であり、たとへジン・ジャンに気付かれなくても、あの書棚の奥の光りの穴からジン・ジャンを覗くときには、すでにその瞬間から、ジン・ジャンは本多の認識の作つた世界の住人になるであらう」と予告していた。そして、本多の認識は、彼の内心の願望を創作し、劇とするのであつた。では、なぜ、本多は、ジン・ジャンが転生者であることを望んだのであろうか。彼は、ジン・ジャンに恋をしており、そのために、「丹念な照合の末、左の脇腹の黒子が依然として見当たらない」ことを、つまり、彼女が転生者ではないことを、望んでいたはずなのだ。

ところが、本多の内心の願望によって創作された覗き穴の世界（認識の世界）では、ジン・ジャンに黒子が現れた。つまり、本多は、一方ではジン・ジャンが転生者ではないことを願い、一方では彼女が転生者であることを望んでいるのである。そのような本多の認識とは、どのような機構のものなのであろうか。

それが彼の考へ方だった。（略）すなはち、自分が望むものは決して手に入らぬものに限局すること、もし手に入ったら瓦礫と化すに決まつてゐるから、望む対象にできうるかぎり不可能性を賦与し、少しでも自分との間の距離を遠くに保つやうに努力すること、……いはば強烈なアパシーとでも謂ふべきものを心に持つること。（略）

むかし清頭が絶対の不可能にこそ魅せられて不倫を犯したのと反対に、本多は犯さぬために不可能をしつらへてゐた。なぜなら彼が犯せば、美はもうこの世の中に存在する余地がなくなるからだった。

〔暁の寺・三九〕

認識者・本多の願望は、「自分が望むものは決して手に入らぬものに限局」し、「犯さぬために不可能をしつらへてゐた」というのである。「なぜなら彼が犯せば、美はもうこの世の中に存在する余地がなくなるからだった」という説明から、本多が、自身を決して行為する者としてではなく、対象に手の届かない認識者として、かたくなに自己規定していることが示される。転生者たちは、「美の厳密な一回性」としてそれ自体完結している。本多は、その完結した転生者を、常に視野におさめ、魅せられつつも、決して自分の手には入らない不可能なものに設定するのである。対象が、彼の手に入ってしまった

ては、彼は「見る」人ではなくなってくる。彼は、対象に惹かれ、入手したいと願いつつ、それを「不可能」なものにして、いつまでも永久にその対象を見ることを自己の役割としたのである。対象の入手が不可能であるかぎり、彼はいつまでも見者であり、永遠の生を保つのである。逆に言えば、生きていくかぎり、本多は、絶対者とはなりえず、転生を見続けなければならないのだ。「客観性の病氣」にとりつかれた者の宿命である。

#### 四

『天人五衰』においては、最後の転生者たる安永透が登場する。認識者として、本多の「雛型」である透については、現在でも、贋物だとする説が多いが、既に早く、村松剛氏が、この問題を精密に検討した上で、失明後の透に『天人五衰』の冒頭に説明されている天人の五衰の様相が現れ出ていること、また、透が『春の雪』『奔馬』『暁の寺』に通ずる過去世を見ていることなどから、「作者は透に本物としての資格を明確に与えているのである」と結論を出している（『天人五衰』の主人公は贋物か）／『三島由紀夫全集』月報・昭和四八・七）。私は、村松氏の推論に賛成したい。

透は、清頭や勲等と同様に、本物の転生者として、本多の認識の世界に住んでおり、本多が得た仏典からの知識通りに「天人五衰」の相が現れたのである。天人（転生者）である透に五衰の相が現れたことで、ここに、清頭から始まった八十年にわたる転生は終わる。本多は、その転生のすべてを見た。即ち、人間の生死や宿命・歴史などすべて

説明できる世界構造を、唯識の研鑽を積むことで、あるいは、その知識をつかって認識世界を作りあげることによって、本多が完成させたのである。

そして、本多は、聡子を訪ねる決心をする。転生が完成して消失してしまっただけ、彼がこれまで生きて、見て、唯識の知識によって作り上げてきた「認識の世界」の存在を証明でき、ともに語り合うことができるのは、転生の原点である清顕との記憶を共有している聡子だけだからである。しかも、聡子は、月修寺門跡となっており、転生の理論である唯識について知悉しているのである。本多は、転生が完成して、転生の証人として見続ける自己の役割も終わり、死期が近づいているのを知って、聡子に会うために奈良に向かう。

しかし、聡子は、清顕の存在を否定する。「それなら勲もなかつたことになる。ジン・ジャンもなかつたことになる。……その上、ひよつとしたら、この私ですらも……」と感う本多に向かい、「それも心々ですさかい」と述べるのだ。

三島は、最後の対談の中で、次のように述べる。

あの作品（豊饒の海）では絶対的の一回的人生といふものを一人一人の主人公はおくつていくんですよね。それが最終的には唯識論哲学の大きな相対主義の中に溶かしてしまつて、いづれもニルヴァーナ（涅槃）の中に入るといふ小説なんです。

「絶対的の一回的人生」をおくるのは転生者であり、それが、「最終的に、ニルヴァーナに入るのには、本多を介してである。本多の「認識の作つた世界」は、人間の到達し得る究極の世界であった。しかし、それは、本多の内世界においてだけ存在する相対的な認識である。聡

子は、すべては、「心々」である、と言う。「その清顕といふ方には、本多さん、あなたはほんまにこの世でお会ひにならしたのですか？」。涼やかな声ながら、聡子の追求は厳しい。認識の作つた劇は、たとえ、それがどんなに完全に世界を解釈することができ、どれほど真実らしくあろうとも、「この世」のものであると確実に証明できる絶対的なものではありえない。認識の世界を作り上げて来た本多の存在を、彼女は、相対的な世界に溶かしこんだのである。認識の不毛な地であると述べてよい。

このように考えてくれば、透の上に天人五衰の相が現れて転生が終わったのも、本多が、自分の死期を悟り、もはや転生の証人に成りえないために、認識の創作世界の中で転生を終わらせたのだと考えることもできる。そして、聡子に逢うために奈良に向かう車中で、本多は次のように決心する。

「自分は今日はもう決して、人の肉の裏に骸骨を見るやうなことはすまい。それはただ観念の想である。あるがままを見、あるがままを心に刻まう。これが自分のこの世で最後の楽しみでもあり、つとめでもある。今日で心ゆくばかり見ること、おしまひだから、ただ見よう。目に映るものはすべて虚心に見よう」

〔天人五衰・二九〕

つまり、それまでの本多の見方は、目が「事物の背後に廻」って、「人の肉の裏に骸骨を見る」ようであったという。このような「観念の想」については、これまで検討してきたとおりで、「不可視のものを「見る」」こと、すなわち、知識と内面の願望によって、事物の上に認識の創作世界を作りあげて見るのである。そして、そのようにし

て見続けてきた（認識によって創作し続けてきた）転生が終わり、死期が近づいてきたのを悟って、「事物の背後へ廻る」見方を自己に禁じ、「あるがままを見」ようとしたとき、本多は、自分の作り上げた認識の世界を聡子によって否定されてしまったのである。

しかし、本多は、唯識の理論に則って転生を見ていたはずである。にもかかわらず、法相宗の月修寺門跡である聡子によって、その世界を否定されてしまうのはなぜだろうか。

現在のこの世界は、本多の作った世界であつたから、ジン・ジャンも共にここに住んでゐた。唯識論に従へば、それは本多の阿頼耶識の創つた世界だつた。が、なほ本多が唯識論に完全に膝を屈することができないのは、彼がその認識に執して、自分の認識の根源を、あの永遠で、しかも一瞬一瞬惜しげもなく世界を廃棄して更新する阿頼耶識と、同一視することを肯んじないからだつた。

むしろ本多は、心に戯れに死を思ひ、その甘美に酔ひしれながら、認識がそのかす自殺の瞬間に、ひたすら見たいとねがつてゐたジン・ジャンの、誰にも見られてゐない琥珀にかがやく無垢の裸体が、爛然たる月の出のやうに現はれ出る至福を夢みた。

〔暁の寺・四二〕

『暁の寺』の説明によれば、唯識では、ふつう人が感じる六感の上に、第七識である末耶識（自我、個人的自我の意識のすべて）をおき、さらに、その奥に、「阿頼耶識といふ究極の識を設想」するという。この阿頼耶識が、「存在の根本原因」であり、「この世界、われわれの住む迷界を顕現させてゐる」のである。しかし、この唯識と、「こち

ら側に一つの実体としての主観を考へ、そこに映ずる世界をすべてその所産と見なす唯心論」とはまったく別物であり、それは、我と阿頼耶識とを混同したことになるという。阿頼耶識とは、一瞬もとどまらない「無我の流れ」であるからである。本多は、唯識を研究し、我と阿頼耶識との相違を知悉しながら、しかし、自分の作った世界を、無私の流れである阿頼耶識の創作ではなく、自分の認識の世界だと信じたいのであつた。「自分の認識に執し」、阿頼耶識と自我とを同一視できなかったのである。唯識を知りつくし、その理論によって、世界解釈ができることを知覚しつつも、なお、自己の認識を捨て去ることができない。自意識に、あるいは自分に執着してしまふのである。認識者・本多の特徴はここにある。

本多はジン・ジャンの裸体を見たいと切望し、「客観性の病氣」と自嘲しつつ覗き見る。そして、後には、自分の書齋で覗き見るだけに止まらず、夜の公園を徘徊して男女の姿勢を覗き見るようになるのだが、その目には「ほとんど切望」があつた。——「俺の目を酔はせてくれ、どうか一瞬も早く酔はせてくれ、世の若い人たちよ、無知で、無言で、しかも老人などには目をくれる暇もないほど、自分たちだけの熱中の姿で、心ゆくまで俺を酔はせてくれ」（天人五衰・二六）

——ほとんど悲鳴にちかい叫びである。ここでの、本多の「見ることは、対象を正確に把握することなど問題としない。とにかく、「俺の目を酔はせてくれ」と彼は切望する。対象の熱中している姿を見ることによって、自己が陶醉し、快楽を得ることが目的なのである。対象自体を見ることより、自己の快楽追求が目的である「見ることは、まさしく、客観性の「病氣」としか言いようがない。

だが、なぜ対象を覗き見ることで、彼の感覚は慰められるのか。覗き見る場面では、さらに、「恋人たちの戦慄と戦慄を等しくし、その鼓動と鼓動を等しくし、同じ不安を顔ち合ひ、これほどの同一化の果てに、しかも見るだけで決して見られぬ存在にとどまること」「暁の寺・三二」と説明されている。自分は、決して見られる存在にはならないという保証のもと、見ることによって、対象と「戦慄と戦慄を等しくし、鼓動と鼓動を等しくし、同じ不安を顔ち合ひ」、その末に、「同一化」の感覚を得るのである。むろん、その同一化は擬似的なものにすぎない。しかし、若いときから、決して自分は、転生する人物たちのような特別な存在には成りえないのだ、という前提のもとに生きつつ、「今にして本多は思ひ起こした。清顕や勲に対する本多のもつとも基本的な感情は、あらゆる知的な人間の抒情の源、すなはち嫉妬だったのだ」と、「嫉妬」を感じるほど激しく彼らに憧憬していた本多にとつて、たとえ擬似的なものであっても、対象と「同一化」できると思えることは、大きな魅力だったはずである。こうして、本多は、対象とつかの間の「同一化」——自分が彼らでもある——という感覚による陶酔を求めて、「客観性の病氣」を繰り返すのである。

このように見てくれば、本多が「客観性の病氣」だとして、自分の姿を相手に見せることなく覗き見ようとするのは、自己の創作する認識世界を壊したくないからだ、と考えることができる。そもそも、人間の身体は、「見るもの」であると同時に、「見られるもの」でもある。そして、自分が「見るもの」であるかぎり、世界を創作する認識の中心は自分であり、世界は自分の目の周りに存在する。一方、自分が「見られるもの」であるときには、自己は、他者のつくる認識世界

の中に位置づけられる。本多は、自分も世界の多様な「見られるもの」の一つにすぎず、自己の創作世界が唯一ではない、という状況を拒否して、「見られるもの」としての自己を隠し、あくまでも自己が世界の中心であり、唯一の主体であるという視点を保ったのである。

転生者に関与したいと願いつつ、しかし、対象を到達不可能なものに設定し、いつまでも追い続け、見続けたいと考える。一人物の中で、「見る」ことが、客観性追求の認識欲と自己陶酔の快楽追求欲とに分化し、それが曖昧なまま癒着しているのである。本多の「見る」ことは、純粹な「あるがままの」対象を見ることが目的ではない。見ることによって、認識世界を作り上げていって、その中で、自己と自己の理想像との同一化をはかり、陶酔を得、自己を慰めることが必要なのである。そのような本多にとって、自分の認識が、自分自身のものではなく、「無我の流れ」である阿頼耶識のものであることなど、認められるはずがない。本多の認識の原点は、強力な自己愛にあったのである。

では、本多が存在の根本だと信じて、また、作品の中でも四巻にわたって延々と開陳されつつつけてきた、唯識とは、どのような意味をもつのであろうか。

世界を存在せしめるために、かくて阿頼耶識は永遠に流れてる。

世界はどうあつても存在しなければならぬからだ！

しかし、なぜ？

なぜなら、迷界としての世界が存在することによつて、はじめて悟りへの機縁が齊らされるからである。

世界が存在しなければならぬ。といふことは、かくて、究極の道徳的要請であつたのだ。それが、なぜ世界は存在する必要があるのだ、といふ問ひに対する、阿頼耶識の側からの最終の答である。(傍点ママ) 「暁の寺・一九」

四巻のうち、理論書の体をとっている『暁の寺』において、一切皆空である「悟りへの機縁が齊えられるから」この世(迷界)は存在しなければならぬ、という唯識の最終的な節理が述べられている。外界の存在に実在性を認めないことでは、たとえば中観派(竜樹)の空の思想と、唯識とは一致している。しかし、中観派は一切を空と見なし、認識さえも認めないが、唯識では、輪廻から解脱するためには、この世が阿頼耶識の所産にすぎないという悟りを得るほかにないとして、最終的には排除されるが、悟達するまでは、人間の認識を認めている。吾達のために認識を認めているのである。この節理から判断すると、本多は、最終的に「悟り」に向かうために、迷界のなかで認識をつづけ、自己の認識者としての存在を否定されるために生きて来たのであった。そして、唯識を世界解釈の鍵だと考えた以上、また、聡子に会うために、「目が事物の背後に廻り」、「観念の想」を作ること禁じた以上、本多は、聡子によって、自我に執着していた自分の認識が否定されることすらもわかっていたはずなのである。そして、本多は、自分の信じようとした唯識の理論にしたがって、自己の世界を否定された。この世が本多の認識によって作られているのではなく、阿頼耶識の所産にすぎないことを知らされ、我の届かない空なる世界に連れ出されてしまったのであった。

## 五

さて、自己に拘泥し、認識によって世界を創造する本多に、作家三島が芸術家としての自分の像を被せていたことは間違いないだろう。ここで詳述することはできないが、特に、三島の戯曲においては、永世の芸術家と一回性の行為者との対立が存在し、葛藤のすえ、一回性の行為者が敗退し、現実を拒否した地点で芸術家が完全な芸術世界を得るという構造が繰り返し描かれている。たとえば、「卒塔婆小町」の人物構造(一回性の行為者・詩人が転生し、それを永世の芸術家・小町が見続ける)は、まさに「豊饒の海」の転生者と本多の関係と同様であるし、『サド侯爵夫人』のルネの、現実を交換して心象世界をつくり、それを現実の上に被覆して、一個の内的宇宙を築き上げていくという認識の仕方は、本多の認識による創作世界と同じ機構である。

また、小説においても、『仮面の告白』では、現実と夢想との落差に直面することを恐れて、現実を直面することを避け、一定の距離をおく認識的な主人公が、最終的には、現実を切り捨て、認識によって構築した夢想の虚妄性の中を生き抜くように決意する。これらの主人公に、三島自身の芸術観、あるいは芸術家観が投影されていると見てよからう。では、このように、自分自身が投影されている認識者・芸術家に、最後の作品の中で、三島はどのような処遇を与えたのか。

『春の雪』の後註で、三島は、『豊饒の海』という題名を、「月の海の一つのラテン名なる Mare Foecunditatis の邦訳である」と説明している。海とは名ばかりの、砂地が想定されているのである。しかも、月は、けっして自ら輝くことはなく、太陽が反射するこ

とで光る。三島が考える芸術家という相対的なものの姿の象徴であろう。ジン・ジャンが、鏡のように本多の心を読んだごとく、この月の海は、本多の認識界の喩である。一見、豊饒に見える本多の認識も、このような荒涼とした月の海に過ぎない。本多は、相対的な不毛の地に送られたのであった。

送りこんだのは、この作品の中で絶対的な位置を与えられている聡子である。そして、訪れて来た認識者——創作者を拒否する点で、『サド侯爵夫人』のルネに相当する。ルネは、サドの執筆した完全な芸術世界だけを選んで、現実のサドを捨象した。だが、昭和四〇年の『サド侯爵夫人』と、四五年に完成した遺作『豊饒の海』とは、そこから大きく相違する。『サド侯爵夫人』の中では、芸術家であるサドは否定されても、彼がのこした「ジュスティヌ」という芸術世界は存在し、現実の世界を支配する絶対的な価値観を与えられた。ところが、『豊饒の海』では、「しかしもし、清顕君がはじめからなかつたとなれば」「それなら、勲もあなかつたことになる。ジン・ジャンもあなかつたことになる。……その上、ひよつとしたら、この私ですらも……」という本多に対して、聡子は、「やや強く本多を見据え」て「それも心々ですさかい」と述べる。認識者——芸術家である本多の存在が否定されるのもとより、彼が築き上げてきた認識の世界も否定されたのである。つまり、創作物自体・書くこと自体が否定されたのだ。昭和四〇年時点では、三島は、書いている自己は信じられなくとも、書くこと自体は信頼し、作り上げられた作品には価値を置いていた。ところが、死の直前には、作品自体がもはや信じられなくなったのである。あるいは、作品も信じられないからこそ、死を選んだと言うべ

きか。作家三島自身も、本多の直面した空の世界に入り込んでしまった。

三島は、「文学というのは、あくまで、そうなるべき世界を実現するものだと信じている」、「ことばの世界で自分の信ずる『あすのない世界』を書くこと」（三好行雄氏との対談・三島文学の背景／『国文学』昭四五・五）という信念をもって、作品を書いてきた。本多の認識が作った世界と同様である。その意味で、三島は、本多その人でもある一方で、そうしてこれまで営々と認識界を築き上げて来た本多を否定した聡子その人でもある。そして、彼は最後の「世界解釈の小説」において、自己の理想たる行為者と、分身たる認識者を渾身の力で書き込み、自らの力で相対世界に送り込んで、作品は完成した。相対世界に漂うものに過ぎないが、認識者として成すべき事はすべて果たしたはずである。唯識の理論によれば、究極には排除されるにせよ、この世が空であるという絶対知を得るまでは、迷界で認識を繰り返さなければならぬのであった。最終的には否定されるにしても、認識者として作品を書かねばならなかったのである。そして、自己に執着する認識者が望む最終のものは、「彼のあなない世界にしか存在しない」のであり、「真に見たいものを見るためには、死なねばならない」のである。——もちろん、一人の人間の死の原因は、複合的なものである。一つに決めることはできない。しかし、遺作を読むかぎり、三島は、自己の理論に従って、作品を書き上げた現実の自己を無意味なものとして捨象し、認識と行為とが一致する地、「死」へと向かった、と考えることも、決して不可能ではあるまい。